

# 小さい太郎の悲しみ

新美南吉

青空文庫



お花畑から、大きな虫がいつびき、ぶうんと空にのぼりはじめました。

からだが重いのか、ゆつくりのぼりはじめました。

地面からメートルぐらいのぼると、横にとびはじめました。

やはり、からだが重いので、ゆつくりいきます。うまやの角の方へのろのろとゆきます。

みていた小さい太郎は、縁側えんがわからとびおりました。そしては

だしのまま、篩ふるいをもって追っかけてゆきました。

うまやの角をすぎて、お花畑から、麦畑へあがる、草の土堤どての上で、虫をふせました。

とつてみるとかぶと虫でした。

「ああ、かぶと虫だ。かぶと虫をとつた」

と小さい太郎はいいました。けれどだれもなんともこたえませんでした。小さい太郎は兄弟がなくてひとりぼっちだったからです。ひとりぼっちということはこんなときたいへんつまらないと思います。

小さい太郎たろうは縁側えんがわにもどつてきました。そしておばあさんに、

「おばあさん、かぶと虫をとつたとみせました。」

縁側にすわっていねむりしていたおばあさんは、眼をあいてかぶと虫をみると、

「なんだ、がにかや」

と行って、まためをとじてしまいました。

「ちがう、かぶとむしだ」

と小さい太郎は口をとがらしていいましたが、おばあさんには、かぶと虫だろうが蟹かにだろうが、かまわないらしく、ふんふん、むにやむにやといって、ふたたび眼めをひらこうとしませんでした。

小さい太郎は、おばあさんの膝ひざから糸いとぎれをとって、かぶと虫のうしろの足をしばりました。そして縁えん板いたの上を歩かせました。

かぶと虫は牛のようによちよちと歩きました。小さい太郎が糸

のはしをおさえると、まえへ進めなくて、カリカリと縁板をかきました。

しばらくそんなことをしていましたが、小さい太郎はつまらなくなってきました。きつと、かぶと虫にはおもしろい遊び方があるのです。だれか、きつとそれを知っているのです。

## 二一

そこで小さい太郎たろうは、大頭に麦わら帽子ぼうしをかむり、かぶと虫を糸のはしにぶらさげて、かどぐちを出てゆきました。

ひるはたいそうしずかで、どこかでむしろをはたく音がしてい

るだけでした。

小さい太郎は、いちばんはじめに、いちばん近くの、桑畑くわばたけの中の金平きんぺいちゃんの家へゆきました。金平ちゃんの家には七面鳥を二羽わかっていて、どうかすると、庭に出してあることがありました。小さい太郎はそれがこわいので、庭までは行ってゆかないで、いけがきのこちらからなかをのぞきながら、

「金平ちゃん、金平ちゃん」

と小さい声でよびました。金平ちゃんにだけ聞こえればよかったです。七面鳥にまで聞こえなくてもよかったです。

なかなか金平ちゃんに聞こえないので、小さい太郎はなんどもくりかえしてよばねばなりませんでした。

そのうちに、とうとううちの中から、

「金<sup>きん</sup>平<sup>ぺい</sup>はのオ」

と返事がしてきました。金平ちゃんのお父さんのねむそうな声でした。「金平は、よんべから腹<sup>はら</sup>がいつてのオ、ねておるだで、今日<sup>きょう</sup>はいつしよに遊べんぜエ」

「ふうん」

と聞こえないくらいかすかに鼻の中でいつて、小さい太郎<sup>たろう</sup>はいけがきをはなれました。

ちよつとがっかりしました。

でも、またあしたになつて、金平ちゃんのお腹<sup>なか</sup>がなおれば、いつしよに遊べるからいいと思ひました。



## 三

こんどは小さい太郎は一つ年上のきよういちくん恭一君の家にゆくことに  
しました。

恭一君の家は小さいひやくしようや百姓家でしたが、まわりに、松やつばき椿や  
かき柿やとち橡などいろんな木がいつぱいありました。恭一君は木登りが  
じょうずでよくその木にのぼっていて、うかうかと知らずに下を  
通つたりすると、椿の実を頭の上に落としてよこして、おどろか  
すことがあります。また木にのぼっていないときでも恭一君は  
よく、もののかげや、うしろから、わつといつてびっくりさせる

のでした。ですから小さい太郎は、恭一君の家の近くにくると、もう油断ゆだんができませんのです。上下左右、うしろにまで気をつけながら、そろりそろりとすすんでゆきます。

ところがきようは、どの木にも恭一君きよういちくんはのぼっていません。どこからも、わつといつてあらわれてきません。

「恭一はな」と、鶏にわとりに餌えさをやりに出てきたおばさんが、きかしてくれました。「ちよつとわけがあつてな、三河みかわの親類きんるいへ昨日きのう、あずけただかな」

「ふうん」

と小さい太郎たろうは聞こえるか聞こえないくらいに鼻の中でいいました。なんとということでしょう！ なかのよかった恭一君が、海の

向こうの三河のある村にもらわれていってしまったというのです。

「そいで、もう、もどつてきやしん？」

と、せきこんで小さい太郎はききました。

「そや、また、いつかくるだらあずに」

「いつ？」

「盆ぼんや正月にやくるだらあずにな」

「ほんとだね、おばさん、盆と正月にやもどつてくるね」

小さい太郎はのぞみを失いませんでした。盆にはまた恭一君と遊べるのです。正月にも。

#### 四

かぶと虫を持った小さい太郎は、たろうこんどは細い坂道をのぼって大きい通りの方へ出てゆきました。

車大工さんの家は大きい通りにそってありました。その家の安雄やすおさんは、もう青年学校にいつているような大きい人です。けれどいつも小さい太郎たちのよい友だちでした。陣じんとりをするときでも、かくれんぼをするときでもいつしよに遊ぶのです。安雄さんは小さい友だちからとくべつにそんなけいさされていました。それは、どんな木の葉、草の葉でも、安雄さんの手でくるくるとまかれ、安雄さんのくちびるにあてると、ぴいと鳴ることができたからです。また安雄さんはどんなつまらないものでも、ちよつと

細工をして、おもしろいおもちゃにすることができたからです。

車大工さんの家に近づくにつれて、小さい太郎の胸は、わくわくしてきました。安雄さんがかぶと虫で、どんなおもしろいことを考え出してくれるか、と思ったからです。

ちようど、小さい太郎のあごのところまである格子こうしに、くびだけのせて、仕事場の中をのぞくと、安雄さんはおりました。おじさんとふたりで、仕事場のすみの砥石といしでかなの刃はをといでいました。よくみるときようは、ちゃんと仕事着をきて、黒い前だれをかけています。

「そういうふうに入力るんじやねえといったら、わからん奴やつだな」

とおじさんがぶつくさいいました。安雄やすおさんは刃はのとき方をおじさんに教わっているらしいのです。顔をまつかにして一生けんめいにやっています。それで、小さい太郎たろうの方をいつまで待ってもみてくれません。

とうとう小さい太郎はしびれをきらして、

「安さん、安さん」

と小さい声でよびました。安雄さんにだけ聞こえればよかつたのです。

しかし、こんなせまいところではそういうわけにはいきません。おじさんがききとがめました。おじさんは、いつもは子どもにむだ口なんかきいてくれるいい人ですが、きようは、何かほかのこ

とで腹はらを立てていたとみえて、太い眉根まゆねをぴくぴくと動かしながら、

「うちの安雄はな、もう今日きょうから、一人前いちにんまえのおとなになったでな、子どもとは遊ばんでな、子どもは子どもと遊ぶがええぞや」と、つつばなすようにいいました。

すると安雄さんが小さい太郎の方をみて、しかたないようにかすかに笑いました。そしてまたすぐ、じぶんの手先に熱心な眼めをむけました。

虫が枝から落ちるように、力なく小さい太郎は格子こうしからはなれました。

そしてぶらぶらと歩いてゆきました。

## 五

小さい太郎たろうの胸むねにふかい悲しみがわきあがりました。

安雄やすおさんはもう小さい太郎のそばに帰ってはこないのです。も

ういつしよに遊ぶことはないのです。お腹なかがいたいなら明日あしたになればなおるでしょう。三河みかわにもらわれていったって、いつかまた帰ってくることもあるでしょう。しかしおとなの世界にはいった人がもう子どもの世界に帰ってくることはないのです。

安雄さんは遠くにいきはしません。同じ村の、じき近くにいます。しかし、きょうから、安雄さんと小さい太郎はべつの世界に



いるのです。いつしよに遊ぶことはないのです。

もう、ここにはなんにもものぞみがないので、こされていませんでした。小さい太郎の胸には悲しみが空のようにひろくふかくうつろにひろがりました。

ある悲しみはなくなることができません。ないで消すことができません。しかしある悲しみはなくなることができません。ないたつて、どうしたつて消すことはできないのです。いま、小さい太郎の胸にひろがった悲しみはなくなることのできない悲しみでした。

そこで小さい太郎は、西の山の上に一つきり、ほかんとある、ふちの赤い雲を、まぶしいものをみるように、まゆ眉をすこししかめながら長いあいだみているだけでした。かぶと虫がいつか指から

すりぬけて、  
にげてしまったのにも気づかないで――

## 青空文庫情報

底本：「新美南吉童話集 2 おじいさんのランプ」大日本図書

1982（昭和57）年3月31日初版第1刷発行

1996（平成8）年2月15日初版第7刷発行

※表題は底本では、「小さい太郎《たろう》の悲しみ」となっています。

※誤植を疑った箇所を、「牛をつないだ椿の木」大和書店、1943（昭和18）年9月発行の表記にそって、あらためました。

入力：江村秀之

校正：諸富千英子

2018年2月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 小さい太郎の悲しみ

新美南吉

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>